

わが恩師—橋本文夫先生の思い出—

名誉教授 荒井 隆

私はかつて、川崎医学会誌一般教養篇、第24号《ドイツ語とわたし》のなかで、いまは亡き橋本先生のことについて若干触れましたが、今回はからずも本医学会誌の「わが恩師」という題目で述べる機会を与えられました。

ここでは、先生との出会いと、前回言い尽くせなかった話題を交えて思い出すままに、書き綴ってみたいと思います。

橋本先生は、1909 (明治42) 年に兵庫県美方郡浜坂町でお生まれになりました。1925 (大正14) 年に旧制第一高等学校文科Z類に入学し、三浦吉兵衛、岩元禎、外国人教師のレオポルト・ヴィンクラー先生などにドイツ語を習われました。そして1931 (昭和6) 年に東京大学法学部政治学科を終えてから、更に1934 (昭和9) 年に同文学部独文学科を卒業されました。卒業後、法政大学予科講師、旧制広島高等学校教授を経て、1951 (昭和26) 年に中央大学文学部開設と同時に教授に招聘されました。その草創期より四十年余にわたってドイツ語教育に専念されて来られました。学部、大学院での講義は、ドイツ語文法、和文独訳、ドイツ語学概論、中世ドイツ語などを担当し、そのかわり同大学学友会所属の学生団体「ドイツ語研究会」(通称「独研」)の会長を努められ、ドイツ語を愛好する学生の指導にあたられました。また、ヤスパース協会の設立に尽力されて、長い間同協会の常任理事をなさっていました。

この間、橋本先生は周知のようにドイツ語学の権威であり、またこれまでに数多くの著書を発表されてきましたが、その中でも大著『詳解ドイツ大文法』(三修社刊)は、ドイツ語を学ぶ者にとって座右の書として広く知られています。そこに見られる学識の深さと平明で理解し

やすい解説はまったく見事なものであります。今も私は何かにつけてその名著を愛用させて頂いております。そしてまた1980 (昭和55)年に、『ドイツ語と人生—橋本文夫記念論文集—』が三修社から上梓されました。これは、先生の中央大学を定年退職にあわせ、古稀のお祝いをするために、多年にわたる研究業績のなかから、ドイツ語学、哲学、宗教に関する論文の一部をまとめられたものです。これは文字通り先生の永年の研究活動の集大成と言えるでしょう。

さて、話は変わりますが、私の大学時代、武蔵野音楽大学そして川崎医科大学に在職していたところに話題を絞って進めていきたいと思えます。私が大学に入学したのは、1955 (昭和30)年ですから、かなり長い歳月が経過しました。前述のように文学部は、当時まだ発足してから歴史も浅く、大半の学生は2年後、法学部に転部する者が多かったと記憶しています。最初に橋本先生にお眼にかかり、親しくその教えを受けるようになったのは、確か大学2年生になってからでした。私にとって最も忘れ難いのは「独語学概論」の講義を受けたことです。その時に採用されたテキストは、関口存男著の『新ドイツ語文法教程』(三省堂刊)でした。ハードカバーの分厚い文法書で、かなり難解な箇所が多くあって苦心しましたが、徐々に興味がわいて勉強に打ち込めるようになりました。授業中先生に眼鏡越しに見られたりすると、ゾクッとする恐れ存在でしたが、しかし誰にでも、とてもやさしく接してくれました。下調べを怠ってきた学生に対しても決して怒った表情を見せず、どんな相手でも親切に教えて下さったのが印象的でした。

また、私は別に教職課程の単位(科目)を履

修していたのですが、大学4年生になると、実習校である中大附属高校で2週間の教育実習に参加しなければなりません。そんなある日、独語科教育法を担当されていた橋本先生は、ご病気で静養中だったにもかかわらず、わざわざ私たち学生数名をご自宅まで呼んで、教育実習の実施にあたっての心得他の細かな指導をしてくださいました。お蔭で、みんな実習は首尾よく終わり、卒業時には、高校・中学の教員免許状(教科:ドイツ語)を取得することができました。そして1958(昭和33)年5月ごろ、卒業論文に関する指導会が開かれたのです。古い木造2階建ての後楽園校舎のある一室に、当時独文学研究室・大場助手(現・専修大学教授)の案内で先生の部屋に通されました。卒論の指導教授でもあった先生は、穏やかな口調で、「卒業論文の方はどうですか?」と質問されて、私は緊張しながら、「はい、いま参考資料を漁っているのですが…」と答えたことを覚えています。そのあと不慣れな私に和・洋書の文献を逐一ご教示して頂いたのです。ほんとうに有難いことだと感謝しております。その時の卒論の題目は、「ドイツ語・前置詞の格支配について」だったと思います。これ等のきめ細かいご指導により卒業論文をなんとか期限までに仕上げ提出することができました。

ところで、私が大学4年生のころだったと思います。NHKラジオのドイツ語講座をいつも聴いておりましたが、1958(昭和33)年7月25日早朝に、いつものようにラジオのスイッチを入れると、突然「今朝、親しまれていた関口存男先生が急逝されました。そのあと橋本文夫先生が担当されます」という放送が流れたのです。とても驚かされたのを憶えております。その後橋本先生は、関口先生急逝のあとをうけて、11月から翌年3月までNHKドイツ語講座を担当されました。そのテキストの巻尾に次の文章をお寄せになっておりますので、ここに掲げさせていただきます。

ああ、関口先生—その人と偉業—

皆さまがラジオで親しまれた関口先生は、7月25日朝5時45分、脳出血で急逝されました。先生は一世に一人出るか出ないと言われるほどの語学の巨人でした。先生の説かれるドイツ語の文法はドイツ本国の文法学者も目を見はるほどに、ドイツ語の生きた血脈を微に入り、細にわたって検べつくし、それを伊・英・蘭などの近世外国語からギリシャ・ラテンの古語や、サンスクリットまでも含む印欧語の大きな生命のなかに位置づけようとするものでした。先生の残されたドイツ語の冠詞の研究は、それだけで菊版2000頁になるだろうと言われて

います。先生は人の長所を生かそうとされました。よい種を育てて、世に雑草のはびこる余地をなるべく狭めようと努められました。弟子を限りなく愛し、質問に答えて倦むことなく、ひとたび教壇に立てば時の過ぎるのを忘れるという真の教育者でした。[後略]

橋本文夫

(昭和33年、NHKドイツ語講座9月号、テキストより転載)

また、前述のドイツ語界の重鎮と称された関口先生と橋本先生のご関係は、ご存知のようにお二人ともドイツ語雑誌《Mein Deutsch》(「基礎ドイツ語」)の同人・執筆者であります。橋本先生はその雑誌(三修社発行)に永年にわたって健筆を揮ってこられました。

1963(昭和38)年2月から64年4月まで、先生はドイツに留学されます。主にドイツを中心としてオーストリア、スイスなどヨーロッパ各地で、仏教(殊に禅)、神道、日本文化などについて講演をされました。そしてまたスイスのバーゼルで行われた哲学者カール・ヤスパース満八十歳の祝賀式典に参列されて、氏との会談も行っております。

私はその後、1959(昭和34)年3月大学を卒業し、幸い武蔵野音楽大学に就職が決まりました。4月より勤めてからも独語学の講義が聴き

たくて中大の後楽園校舎や神田駿河台校舎（現・多摩校舎、東京・八王子市東中野）に通い、予め先生の許諾を得て聴講させて頂きました。はじめの2年間はもぐりの聴講生でしたが、あとの1年は正規の聴講生として先生の名講義を拝聴できたことは、まことに幸甚でした。

個人的なことになりますが、1975（昭和50）年に、私は初めて教本を著すことになります。その際に先生は私の拙い原稿をくまなく目を通してくださり、誤りなどを見つけると、一点一画おろそかにせず朱筆を入れ、そして自ら出版社に相談して出版の労をとって下さったことなど、筆舌に尽くせないほどお世話になりました。

私と川崎医科大学とのご縁は、1978（昭和53）年1月橋本先生からじかに「川崎医科大学の専任に推薦するからできるだけ早く返事をください」と、ご連絡を頂いたことです。ありがたいお話を頂き、熟慮のすえ承諾いたしました。この様にして先生のお世話で川崎医科大学の専任教員に決まった次第です。4月に赴任しましたが一時、私は教育や研究に没頭できずに悩んだ時期がありました。そんな折、先生から温かい激励のお言葉をかけて下さり、かつ勇気づけられましたことを憶えております。爾来、なんとか新しい職場にも徐々に慣れて、教育・研究に

打ち込めるようになりました。私はこれまでに、なんの恩返しもできませんでしたが、一度だけ先生が喜んで下さったことがありました。それは先生から次のようなお葉書を頂いた時のことです。

「冠省 郁文堂からお出しになった《Johanna Haarer: Vorbeugen ist besser als Heilen》を有難く頂戴しました。懇切丁寧な御注は大変見事な出来ばえです。先は右御礼まで。目下静養中ですから短いお便りで失礼します。昭和57年10月1日」

先生は近年健康がすぐれず、ご静養をなさっておられ、とても気にかかっておりました。その数ヶ月後、1983（昭和58）年8月23日先生の訃報の知らせを受け、すっかり仰天し言葉を失ってしまいました。また旺盛な執筆活動に復帰されるものと信じていただけに、とても残念でなりません。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。私は退職後、東京・板橋区の橋本先生の御宅を訪ねて、ご仏前にその報告をさせて頂きました。その際、奥様から最晩年の先生についてお話を伺うことができて感激いたしました。

先生、長い間本当にありがとうございました。

文献・資料

- 1) 橋本文夫：「ドイツ語と人生」－橋本文夫記念論文集－，三修社，1-12，231-251，1980年
- 2) 大岩信太郎：「ドイツ語のこころ」三修社，195-200，1997年
- 3) 荒井 隆：「ドイツ語とわたし」川崎医学会誌一般教養篇，第24号1-7，1998年
- 4) 前野光弘：「中央大学文学部の五十年」－独文学専攻の歩み－中央大学創立50周年記念事業企画委員会編，82-87，1998年
- 5) 荒井 隆：「ドイツ語にかかわって」西日本法規出版，私家版，42-52，2002年